

研究タイトル：

## 大正期における日本〈文学〉の生成



氏名： 大久保 健治 / OKUBO Kenji E-mail: okubo@oshima-k.ac.jp

職名： 教授

所属学会・協会： 日本近代文学会, 日本文学会, 有島武郎研究会

キーワード： 日本近代文学, 有島武郎

技術相談  
提供可能技術： ・日本近代文学に関する大正期資料  
・文学に関する講座、発題

### 研究内容： 大正期における日本〈文学〉の生成

小説は、明治期に流入した新しい文化として、日本の文化圏内でその位置取りを模索した。その結果、文学や小説という用語は、現在においては不特定の誰かがある事象を評価する際のニュアンス〈文学的なるもの〉に深く根を下ろすことになった。つまり、文学が存在することよりは、むしろ文学の機能面に、文学は存在基盤を見出されたのである。

いかなる要因により文学は〈文学〉足らしめるのか。一般的には、優れた人物が書く、良質な文章を、我々は文学と呼ぶ傾向にある。ただし、ある絶対不変の価値を保証されたものとして、またはある特性によって認知される文学と言うのは、そもそも存在しない。文学という用語の空疎な容器に、特定の歴史的範疇を持つ社会が作りだす〈文学的なるもの〉の感覚が、あたかも不変の定義として詰め込まれているにすぎない状況を把持する必要がある。何に価値があるかは、時代により多種多様な価値を決定する基準により選択された、受動的な所作に他ならない。したがって、その価値の判断基準を明らかにすること、それが文学を語る営為だとひとまず結論づけられよう。

上記の方向性から文学を見つめ直すことは、学問的領野から立ち位置を披歴すると、歴史社会学に理論的には依拠している。T.S.クーンのパラダイム理論を、文系の学問領野に援用し、〈文学なるもの〉が、作品の成立、享受に影響を与え続けてきた事態を捉え、文学を可変する集合体として解釈することを研究の主眼目とする。研究の対象とするスパンは、大正期である。わずか約15年の短期間でありながら、名作と我々が認める作品が、およそこの時期に出揃っている事実は興味深い。当時の文学の隆盛を支えたのは、日清、日露戦争の経験から膨張した、ジャーナリズムが作り上げた言説空間であった。言説の大量生産、大量消費のシステムの強度により、作品は優れた作品として、人口に膾炙するに至る。個人的な感性に訴えかけることが文学の命題だと考える見取図からは、名作がなぜ今日までその座を失わないのかを説明することはできない。名作という幻想とは、マスメディアの情報による文学の単一的なイメージ戦略によるものなのである。作者はそこでイメージの膨張を助ける装置として機能する。作品が、作者の思想と合致するように思えるのは、画像、経歴などがジャーナリスティックの空間性の中で跋扈しているからに他ならない。そのような文学に纏わるイメージを作り上げる言説空間が大正期に出現した事実を焦点化する。その影響力は現代に至るまで及んでいる。むしろ、現代はその時点から、一歩も抜け出すことができない程度に、大正期の文学観の圏内に置かれているとも考えられよう。大正期の文学をジャーナリスティックな言説空間の中で捉えなおすことにより、文学解釈の新たな地平を切り開くこと。当研究では、新聞雑誌等に散見される文学作品、評のみではなく、他の領域の言説中の〈文学なるもの〉あるいは、文学的な要素を検証する作業を通じ、文学言説の一瞥では判然としない〈法〉を見出すことを目的とする。

### 提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	